うづみ火

長谷川時雨

青空文庫

兩國といへばにぎわ敷所と聞ゆれどこゝ二洲橋畔のやゝ上手御藏橋近く、一代の富廣き庭廣き家々もみちこほるゝ富人の構えと、昔のおもかげ殘る武家の邸つゞきとの片側町、時折車の音の聞ゆるばかり、春は回向院の角力の太鼓夢の中に聞て、夏は富士筑波の水彩畫を天ねむの後景として、見あかぬ住居さりとて向島根岸の如き不自由は無、娘が望かなひ、かの殿の内君とならば向河岸に隱宅立てゝと望は、あながち河向ひの唄女らが母親達のみの夢想にもあらぬぞかし。

洗出の木目の立た高からぬ塀にかゝりて、盛はさぞと思はるゝ櫻の大木、枝ふりといゝ物好な一構、門の折戸片々いつも内より開かれて、づうと玄關迄御影の敷石、椽無の二枚障子いつも白う、苔井のきわの柿の木に唯一ツ、光程じゆくした實の重さうに見へる、右の方は萩垣にしきりて茶庭ら敷折々琴の昔のもるゝもゆかし。

安井別宅との門札、扨は本町のかど通掛りの人もうなづく物持、家督は子息にゆづりて此處には半日の頃もふけし末娘、名さへ愛とよぶのと二人先代よりの持傳家藏はおろか、近頃手に入し無比の珍品、名畫も此娘の爲には者數ならぬ秘藏、生附とはいへおとなし過とは學校に通ひし頃も、今琴の稽古にても、近所の娘が小言の引合は何時も此家の御嬢樣との噂聞に附、尚々父親の不憫増なるべし。

いつもはお庭に松葉もは入時分秋頃から御隱居樣のはさみの音も聞えず、どうかなされた事かと拾八九の赤ら顔紫めりんすと黒の片側帶氣にしつゝめづら敷車頼に來たお三をつかまえて口も八町手も八町走るさすが車屋の女房の立咄、どうして〳〵御庭いぢり所か御本宅にては御取込で御目出度けれど、此方樣では秋からかけて嬢樣の御病氣、御隱居樣の御心配それは〳〵實に御氣の毒でならぬ、今年は菊も好出來たけれど御客も遊ばさぬ位、御茶の會御道具の會、隨分忙敷時なれどまるで、火が消たやう、私らも樂すぎて勿體無早く全快遊ばすやうにと祈つては居けれ共、段々御やつれなされてと常にも似ず凋るゝに、それは〳〵知ぬ事とて御見舞もせなむだがさぞまあ旦那樣は御心配、御可哀想に早く御全快おさせもふし度、そして又御本宅の御取込とは御噂の有た奥樣の御妹子が御方附になるの、彼宅は御目出度事さぞ此宅の旦那樣もどんなにか御うらやま敷だろふねとの同情、ほむに御隱居樣も御出掛遊ばすのであつた、急で御頼申升よ御藥取に らねばとかけ行に、女房も無言處除はづして金紋の車念入に拂、あづかりの前掛てうちん取揃えれば亭主の仕度も出來ぬ、今迄は無沙汰したのが面目無何と御見舞言た物やらと、獨言引出したとたんがら〳〵と淺草の市歸か勢よく五六臺、前後して通ぬけぬ。

風は寒が好天氣淺草の觀音の市も大當、川蒸汽の汽笛もたえずひゞく、年の暮近し世間は何と無ざわめきて今日はいぬの日、明日はねの日とりの日、扨も嫁入ざたの多事今宵本宅の嫁の妹折枝とて廿を一越た此間迄寄宿舍養ち、早くから姉夫婦に引取れて居たので、本家の娘として此處の孫としての嫁入、進まぬながら是も義理と、ひる前に隱居も古銅の花瓶と、二幅對の箱と合乘でゆかれた跡入替に、昨日花屋から來た松の枝小僧が取にくる、御上の分下の分とわけた御膳籠もは入附添の手代より目録もそれ〳〵行渡り役目すめば御祝酒の り女子供にざれかゝり大聲立て、ばあやにゝらまれこそ〳〵と出行跡、ばあやも跡の事心附て自慢のかね黒〳〵

と大奥様が形見の鼠小紋三紋附着ておよろこびやら、皆々の御禮も兼て。

さ今の内お風呂にでもおは入なさつて少し御庭でも御覽なさいまし、おやすみ遊ばしての内私が御附申て升柄と、看護婦に替しは兼とよびて年も同十七の氣に入、差よつてほつれ毛をかきあぐればほろ〳〵と涙白枕に毛布に、お嬢様御察申升かねは口惜て〳〵彼方の奥様に喰附てやりとう御座升、ばあやさんもばあやさんだ貴女の敵におよろこびにゆくなむて、義理だつても私口惜貴女〳〵はなぜ、御教申たやうに御父様や御兄様におつしやらなかつたので御座升よお嬢様、唯心で涙をこぼしていらつしやる柄猶御病氣も重り升わと、主人ながら友達共思ふ仲よしのかうは言た物の、言過て病にさわりはせぬかと今更冷汗色をかえての心配顔、嬉敷に附我身のかひ無は堪兼て夜着に顔差入て忍なき、兼が進る藥に息をついて兼やもう御言で無よ、此様な病になつた爲父様と姉様の御仲も丸く美敷すんだのは、家の爲によろこんでいるは私、靜夫様は肺病だからとて死と定つているではなしと、言はつて下すつた物の先様でもお一人子御兩親の御不服なのは、あたり前だわね、ちいつともうらむ事は無ねえ兼、よし折枝さんがゆかぬにした所がどうでよそからおもらひ遊ばすのだ物、御姉様の御望をかなへた方がねそうであらふだが今朝も父様が悲想なお顔を遊ばして、私しや自分の慾はあきらめているがせつ角父様もゆるして下すつて、だが父様はどうして靜夫様と御知りなすつたのだろふ、兼知て居て、知ている所か私柄と、いやまて思は思を生で心經の高ぶつて居今、先何事も胸にと、ほんに承はれば兼がわるう御座升だが嬢様御結婚はなさらず共御心に替り無ば、お嬉しう御座ませう靜夫様も決て貴女をおわすれは、これ覺がお有でせうと取出す手箱の内香わせし白ばら一輪、中に深雪つもる夜の明星かとばかり紫匂ふダイヤモンド、此指輪は彼人の手に日頃光しそれよ白ばらは二人が紀念の、さゝやきし其時の息やこもるなつかしやとばかりつく息も苦氣なり。

兼が涙ながら來し頃は早暮て、七間間口に並びしてふちん門並の附合も廣く、此處一町はやみの夜ならず金屏の松盛ふる色を示前に支配人の立つ居つ、何の奥様一の忠義振かと腹は立どさすが襟かき合せ店に奥に二度三度心ならずもよろこび述て扨嬢様よりと、包ほどけば、父親の好戀人の意匠、おもとの實七づゝ四分と五分の無疵の珊瑚、ゑりにゑりし花笄、今宵の縁女となる可、兄より祝物、それを贈心はと父親も主もばあやも顔見合すれば兼は堪かねて涙はら〳〵こぼしつゝ外にも一品花嫁には幸に見られねど盃受く靜夫はわな〳〵と、打ふるひぬ、つき上る苦敷思も涙も共に唯一息眼つぶりてのみ込ば、又盃は嫁に　りぬきらり取手に光物靜夫が目に入し時、花笄の片々する〳〵とぬけて、かた袖仲人が取つくろふひまも無、盃臺のわきにみぢんとなりておもとの實は、ころ〳〵と靜夫が袴の前にころがりぬ。

祝儀すむやそこ〳〵定紋の車幾臺大川端の家にとむかへり、あわれ病人やあつしくなりにしがあたゝかき息こもるうぶらの園うやさまよう、細き息の通ふばかりとや、にぎしき家の外にも淋敷こゝの庭木にも夜一夜木枯の吹あれて、あくるあしたよりあわれ父翁の面痩目にたちぬ。

「うづみ火」のこと

陸中國釜石鑛山内水橋康子として懸賞に應募し、明治四十

三年十一月號の『女學世界第一卷第十五號定期增刊「磯ちどり」才媛詞藻冬の卷・小説』の初頭に掲載され特賞（賞金十圓）を得、又主幹松原二十三階堂（岩五郎）氏に激勵鞭撻の書簡を送らる。當時病後靜養に釜石鑛山所長横山氏家に遊行中の事なり。二十三歳の秋、處女作。未だ「しぐれ女」のペンネームを使用せず。

青空文庫情報

底本：「時代の娘」興亞日本社
　　1941（昭和16）年10月22日発行
　　1941（昭和16）年11月26日再版
初出：「女學世界第一巻第十五號定期増刊「磯ちどり」才媛詞藻冬の巻・小説」
　　1910（明治43）年11月号
※底本では表題の下に、「（處女作）」と入っています。
入力：門田裕志
校正：野口英司
2010年2月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うづみ火

長谷川時雨

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/